

## ヴェルヌはメルヴィルを読んだか？

小谷野敦

ジュール・ヴェルヌ Jules Verne の『海底二万リユー』(Vingt mille lieues sous les mers, 1870)に、「モービィ・ディック」の名が二度にわたって出てくる。いまだノーティラス号の正体が分からない段階で、人々がこれを正体不明の海棲巨大生物だと考え、巨大イカ・クラークンではないか、あるいは白い鯨のモービィ・ディックではないか、と噂するのである。ヴェルヌはメルヴィルの『モービィ・ディック』(1852)を知っていたのだろうか。この問題は、私市保彦の『幻想物語の文法』(晶文社、1987/ちくま学芸文庫、1997)の第12章「大魚に吞まれる」に論じられている。モービィ・ディックの原型となったのは、1840、50年代に捕鯨者の間で有名だった、チリのモウチャ島付近に現れた巨鯨 Mocha Dick で、これはモービィ・ディックのモデルとして夙に知られているが、ヴェルヌが書いたのは飽くまでモービィ・ディックである。いや、実は、当該箇所は、初版では、Moby Dick ではなく、Maby Dick と印刷されていた。国会図書館で閲覧した十一版は、エツェルの初版で、刊行年は欠けているが、「明治八年購求」(1875)の印があるから初期のものであることは確かで、二箇所ともこの表記である。高岡厚子氏に伺ったところ、雑誌『教育と娯楽』(Magasin d'education et de recreation) 掲載時にも Maby Dick だったが、初版刊行後、さほど遅くない時期に訂正されたようで、現在の版は Moby Dick に直っている。しかも、1885年にロンドンで刊行された英訳は、訳者名不明だが、二度目にモービィ・ディックの名が出るところで、`Krakens, sea-serpents, "Moby Dicks"' と字は直っているが複数になっている。念のため 1875年のボストン版も見たが同じだった。ヴェルヌの原文は、`l'existence des krakens, des serpents des mer, des 《Maby Dick 》' となっており、クラークンは普通名詞として複数になっており、`Maby Dick' のジェンダーが不明だったので複数にしてしまい、英訳がこれを踏襲したようである。しかし、早い時期にフランス語版で訂正されたことを見ると、単なる誤植の類であって、曖昧な噂などで「モービィ・ディック」の名を出したわけではないことが確認できる。

さて私市は、1851年にフランスのフィラレット・シャルが書いた『19世紀アングロ・アメリカの文学と風俗研究』に、メルヴィルの作品が『マーディ』まで紹介されており、『モービィ・ディック』がフランスで翻訳され、知られるようになったのは20世紀に入ってからだ、として、ヴェルヌが白い鯨モービィ・ディックの名を出したのは、噂で聞いたかしたのではないかと結論づけている。実のところ、ジュール・ヴェルヌは、明治期日本で最も多く翻訳されたフランスの作家だが、一般に大衆冒険作家と見なされているせい、日本での研究は多くない。アメリカ文学との関係で言えば、ポオとのそれについては、ヴェルヌ自身が評論 Edgar Poe(1864)を書いたこともあり、『海底二万リユー』の末尾でもポオの『ナンタケット島のアーサー・ゴードン・ピム』に触れられているし、ヴェルヌとポオの関係はしばしば論じられている(1)。しかしメルヴィルについては、『モービィ・ディック』が不評を被り、次の『ピエール』に至ってほとんど読者、批評家から見放され、忘れられていったという事情も手伝って、「手がかりなし」の状態にある。もっとも、近年

の研究では、メルヴィル晩年の不遇はいくぶん誇張されており、それまで言われていたように、死亡記事も小さいのが一つ出ただけではないことが分かっている。

しかし、私市も言っているように、『海底二万リユ』は、『モーヴィ・ディック』との類似があまりに甚だしい。この小説は、当時の科学技術の粋を尽くし、未だ実現していない潜水艦ノーティラス号と、その船長ネモを主人公とし、その艦に囚らざるも乗り込む運命になったアロナックス博士の視点から描かれている。ところが、いったんアロナックスと他の二人がノーティラス号に乗り込んだ後は、ことさらな太い線を持った物語が展開するわけではない。長編は、むしろ科学技術的な議論、海中の生物に関する博物学的議論で埋めつくされており、あたかも『モーヴィ・ディック』さながらである。かつ、ネモ船長の、エイハブに比せられる謎めいた正体。ネモは、どうやら英国恨みを抱いているらしいが、地上の世界全てに背を向けて、ノーティラス号による果てしなき航海をもくろんでいるようだが、遂にその恨みがどのようなものかは明らかにされない。ただ小説の終わり近くでネモは、悲劇的な最期を遂げたらしい妻と子を追懐しているが、これまた、最後の方になって、陸地に置き去りにした妻と家庭を思うエイハブを思わせる。そして、夙に指摘されている、ヴェルヌとメルヴィルの女性嫌悪は、この二つの長編にも見て取ることができる。いずれも、女性が生身の姿で現れることは一切ない。

これらの類似を、偶然の産物と片づけることも可能だろう。当時、海洋冒険小説は一種の流行だったし、女性嫌悪も、ショーペンハウアーからポドレル、ニーチェに至る、19世紀西洋の流行だったとも言える。しかし、ヴェルヌがメルヴィルを知っていた可能性はないだろうか。ヴェルヌはポオには言及している。しかしその当時、ポオは英米でさほど理解者を得ておらず、ポドレルが高く評価して仏訳五巻を刊行したために、却ってフランスで有名だった。だからこそヴェルヌはポオの名を出しえたのであって、フランスでは無名のメルヴィルの名を出したとしても余り意味はなかつただろう。次の問題は、ヴェルヌがどの程度英語が読めたかということである。私市も前提としているように、一般的にはヴェルヌは英語はできなかつたとされているが(2)、ヴェルヌの知的活動は極めて旺盛であり、若いころは演劇を志してシェイクスピアに心酔し、小説家に転じてからは、当然ながら当時の日進月歩の科学技術に深い関心を持っている。少年時代には、ギリシャ語とラテン語の作文で賞も受けている(3)。1859年、31歳になる年にはスコットランドを旅行し、英国のリベラルな政治風土に関心を抱き、ウォルター・スコットに思いを馳せてスコットランド最頂になっている。1867年には3月半ばから4月半ばまで米国旅行に行き、僅か一週間ながら米国に滞在し、ニューヨークからオルバニーまでハドソン川を航行して、ナイアガラの滝まで行っている。そして南北戦争に深い関心を抱いて、1887年には、この戦争を舞台とした長編 Nord contre sud を刊行している。こうした関心を持つ当時のフランスの知識人として、英語を読むことがまるでできなかつたとは考えられない。

もう一つ気になるのは、ヴェルヌが「詐欺師 - - アメリカの風習」(Le Hambug--Moeurs americaine, 死後刊行の短編集 Hier et demain 1910 に収録) という短編を書いていることで、これは『ユリイカ』のヴェルヌ特集(1977年5月)に宇佐美齊の邦訳がこの題名で載っている。物語は、語り手であるフランス人が、1863年、ハドソン川上、ニューヨークからオルバニーへ向かう蒸気船ケンタッキー号に乗船している場面から始まる。船内では謎めいた荷物を携えた奇妙な男が話題になっており、その後この男はオルバニーで万国博

覧会を開催しようとしていることが分かるが、その建設地から太古の生物の化石が見つかったというのでニュースになる。だが、これが単なる動物の骨を寄せ集めたもので、詐欺だったことが判明するというものである。メルヴィルが長編『詐欺師』(Confidence Man)を刊行したのは1859年で、こちらはミシシッピ川上の船が舞台になって展開する奇妙で複雑な物語だ。さて、ヴェルヌのほうで気になるのが、はじめ、船の上で、語り手の話し相手として登場するのが、メルヴィル夫人という女性であることだ。この短編が、ヴェルヌの米国旅行の体験に基づいているのは間違いない。メルヴィルというのは、米国では特に珍しい姓ではないが、どうも気になるところだ。

あるいは『海底二万リユール』の最後のほうには、堂々たる鯨談義さえ出てくる。登場人物らは、いわゆるひげ鯨が乱獲のために滅びゆくのではないかという懸念を語り合うが、獰猛で恐ろしいマッコウ鯨についてはこれとは別種の存在として議論の種にしているのだ。『モービィ・ディック』は当時顧みられなかったとされているが、1862年、Captain E. C. Williamsが編纂した、Life in the South Seas, History of the Whale Fisheries, Habits of the Whale, Perils of the Chase and Method of Capture というニューヨークで出版された本に、『モービィ・ディック』の一部が収録されている。こちらは版を重ねているから、冒険談の収集に熱心だったヴェルヌが、この書物を通してモービィ・ディックの名を知ったことも考えられる。

しかしいずれも、状況証拠でしかない。とはいえ、『海底二万リユール』は、大衆向け冒険小説作家、SFの先駆者ヴェルヌの作品として、色眼鏡をかけて読まれているのではないだろうか。もし虚心にこの作品を読むなら、「フランスの『モービィ・ディック』」くらいの評価をされてもいいのではないか。もしヴェルヌがメルヴィルの長編を概略なりとも知っていて書いたのなら比較文学上の重要な主題になるだろうし、知らずに書いたとしたら、私市も言うように、大西洋を挟んで二人の作家がこうも似たところの多い作品をものしたこと自体が興味深い。なかんずく、ネモ船長という人物は、冒険小説の登場人物としては陰影に富んで興味深すぎる。メルヴィルに対しては、夙にシェイクスピアの影響が言われており、エイハブにはリア王の面影があるけれど、若き日のヴェルヌもまた、シェイクスピアに心酔して全集を買い揃えていたのだ。ヴェルヌが、ハーマン・メルヴィルという、本国でもあまり有名ではなく、フランスでは無名の作家のことを気にしていたというくらいのはあったのではないか。

大橋健三郎による書誌「日本におけるメルヴィル」は、大正十三年に来日したエドモンド・ブランデンから、東京帝国大学の学生だった阿部知二がメルヴィルのことを聞き、昭和九年に『メルヴィル』を刊行したこと、昭和二年に竹友藻風が「ハアマン・メルヅル」を書いたとかいったあたりから始まっている。しかし、『海底二万リユール』は明治十年代にいくつか邦訳が出ている。明治十三年の鈴木梅太郎訳『二万里海底旅行』は残念ながら現物が残っていない(なおこの鈴木梅太郎は、年齢的に、オリザニンの発見者ではありえない)。明治十七年の井上勤訳『ジュールス・ヴェル子ー 海底紀行 - - 六万英里』(博文社)を見ると、「白色ノ鯨魚北海ノ「モビー、チック」」とあって、その下に角書き式に「大蛇」とあり、二度目は「「モビー、チック」と云ヘル海中ノ大蛇ナラン」とある。「クラケン」のほうは、「大魚」とあるが、「鯨魚」と書いておいて「大蛇」もおかしい。しかし、当時のフランス語版のみから翻訳したなら、「マビー、チック」になっていたのではないだろう

か。井上は英独仏各国語に通じており、英訳は1773年に米国で早くも刊行されているから、こちらを参考にしたのか、それとも英語版からの重訳だったのか。同年、こちらははっきり英訳からの重訳と銘打って、大平三次による邦訳の上巻が四通社から『ジュールス・ベルン 海底旅行 - 五大洲中』として出ているが、そこでは冒頭部分は抄訳されており、「白蛇なり白鱈なりと」人々が言ったとあって、モービィ・ディックの名は出てこない。さて、ということは、日本におけるメルヴィル書誌は、井上によるヴェルヌの邦訳をもってメルヴィル紹介の前史とすべきではないだろうか。新潮文庫版『白鯨』(1952)で、訳者の田中西二郎は、夏目漱石の『吾輩は猫である』は、『モービィ・ディック』を下敷きにしているのではないかと、ロンドン留学中、漱石は、当時忘れられた作家だったメルヴィルを読んでいたのではないかと書いている。これはあまりに空想的過ぎるけれど、白鯨モービィ・ディックの名だけは、明治期日本の文献に、はっきり記されているのである。

(1) 高岡厚子の一連の論文がある。たとえば「ジュール・ヴェルヌとエドガー・アラン・ポー - 『海底2万里』の成立をめぐる」(『梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学編』27、1992)。

(2) The Complete Jules Verne Bibliography (<http://jv.gilead.org.il/biblio/essays.html>) by Volker Dehs, Jean-Michel Margot & Zvi Har'El には、ヴェルヌが読んだり話したりできたのはフランス語だけだったので、ノンフィクション『地球の発見 - 偉大なる冒険と冒険家の歴史』を書くために、ガブリエル・マルセルの助けを得たと書かれている。なお贅言ながら、このマルセルは二十世紀の哲学者とは別人。

(3) Jean Jules-Verne, Jules Verne: A Biography. Trans. Roger Greaves (New York: Tappan Publishing Co., Inc., 1976) を参照した。

(4) 大橋「日本におけるメルヴィル - 受容のパースペクティブと展望」(大橋編『鯨とテキスト - メルヴィルの世界』国書刊行会、一九八三)。